

学校と地域とを繋げるトークフォークダンスの実践 — 挑戦を語り、協働を生む可能性の場として —

多賀 秀徳（三重県立飯南高等学校）

1. はじめに

高等学校では、令和4年度入学生から年次進行で新学習指導要領に基づいた教育課程が実施されている。今回の学習指導要領の改訂では前文が附され、社会に開かれた教育課程について次のように記載された。

教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。（注1）

そして文部科学省は、社会に開かれた教育課程の実現が求められることに対して次のように回答している。

社会のつながりの中で学ぶことで、子供たちは、自分の力で人生や社会をよりよくできるという実感を持つことができます。このことは、変化の激しい社会において、子供たちが困難を乗り越え、未来に向けて進む希望や力になります。そのため、これからの学校には、社会と連携・協働した教育活動を充実させることがますます求められます。（注2）

さらに資料では、資質・能力の三つの柱やカリキュラム・マネジメントなど、新学習指導要領における重要な事項の全ての基盤となる考え方として社会に開かれた教育課程を位置付けており、それを支える制度としてコミュニティ・スクールと地域学校協働活動を示している（注3）。このため、生徒のより良い学びを実現していくためには、学校と社会（地域）とが協働していくことは必要不可欠であると言えよう。

さて、筆者が在籍する三重県立飯南高等学校は「県立高等学校活性化計画」に基づいて2017年度に「飯南高等学校活性化協議会」を設置し、地域行政や同窓会、PTA、連携中学校、地域住民らとともに、学校の活性化や魅力化に取り組んできた（注4）。そして2019

年度には、文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の採択を受け、地域を学び場とした探究活動を展開してきた。またこの事業において、飯南高等学校活性化協議会を核として「地域人材育成コンソーシアム・いいなん」が設置された。このことで、高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会が報告書において示した、「『社会に開かれた教育課程の実現』と『学校を核とした地域創生』の好循環の基盤となる協働の組織体制」に類似した形ができあがった（注5）。

一方で、本校は2021年4月1日からコミュニティ・スクールとして動き出すこととなった。そのため、設置期間が2021年度末となっていた飯南高等学校活性化協議会と地域人材育成コンソーシアム・いいなんの両組織が「学校運営協議会」という形で発展的に継承していった。また、本校と連携型中高一貫教育を実施している飯南中学校は2018年度より、飯南中学校は2020年度より学校運営協議会が立ち上がり、飯南・飯高管内ではすでにすべての小中学校がコミュニティ・スクールとなっており、2021年度から飯南・飯高地域の小中高がコミュニティ・スクールとして繋がることとなった。

以上のような形で、本校は文部科学省事業の採択も相まって、地域との協働体制を構築してきた。しかし、学校現場は教職員の異動が多いため、せっかくの体制も学校主体での活動に頼ってしまうと、生徒の学びを持続的に展開することは困難になる可能性がある。そのため、これまで構築してきた体制を活かし、産官学民が協働して地域を学び場とした活動を推進していく必要がある。これは当事業でみえてきた本校の課題でもあり、より地域も主体的に関わり、教職員の誰が担当となっても学びが続いていく体制づくりが求められる（注6）。

そのため、生徒のより良い学びを実現していくためには、既存の体制をうまく展開して地域も主体的に学校に関与できる形を創る必要がある。現状では、1年次「産業社会と人間」における年2回のフィールドワークでの運営支援や地域の方々との紹介、各年次発表会の参観や評価、3年次「いいなんゼミ」（総合的な探究の時間）での伴走など、様々な活動でコミュニティ・スクール関係者との繋がりはあるが、多様な生徒と地域の方々との考えを交流できる機会はまだまだ十分とは言えない（注7）。また、コミュニティ・スクールの在り方等に関する検討会議がコミュニティ・スクールの運営上の課題として指摘している「会議の開催が目的化（注8）」しないためにも、関係者が当事者として学校運営に参画できるように、学校と地域がともに育てる生徒との交流を深めることは重要な要素だと考える。

そこで、生徒と地域の方々との考えを交流できる機会づくりとして、授業において「トークフォークダンス」を実践した。本稿では、全国各地で実施されているトークフォークダンスの事例を踏まえ、トークフォークダンスが生徒と地域の方々との交流を深めていく場として機能していくのか、そして社会に開かれた教育課程を展開していく上で有益な方法であるのか実践内容をもとに検討していきたい。

2. トークフォークダンスの事例検討

(1) トークフォークダンスについて

トークフォークダンスとは、フォークダンスのように相手を変えながら1分程度の短時間で対話（トーク）を繰り返していく方法のことをいう。すぐに相手を変えていくため多くの参加者とコミュニケーションをとることができ、短時間ながらも対話力の向上を図ることができる。実施には参加者が入りうる場所やイスがあればよく、専用の道具を必要としないため、校内で実施が可能であれば特に費用がかからないところもメリットに挙げられる。場をコーディネートするファシリテーターの存在は必要であるが、「やっているうちに、場それ自体が熱を帯びてくる（注9）」ため、ある程度動き始めれば場の流れに乗って進行することができる。

トークフォークダンスの運営冊子を編集・発行する福岡市直方市の市民グループのおがた未来カフェによると、「2011年に、当時の福津市立福間中学のコミュニティ・スクール担当である井上伸和先生が、コミュニティ・スクール先進地である京都市で開催されていた『しゃべり場』という対話の場で行われていた一つのやり方を参考にして、福間中に持ち帰った」とある。そして、その進め方から井上氏が「トーク・フォークダンス」と名付け、おがた未来カフェはそれを手本として実践している（注10）。以上よりトークフォークダンスは、少なくとも2011年までには開発されている対話の手法の1つである。

また、おがた未来カフェによれば、トークフォークダンスの持つ可能性として、以下の5つを挙げている（注11）。

1. 自己承認意識の向上
2. 新しい視点・価値観の発見
3. 斜め・横（身近で対等）の関係性の発見
4. 大人も新しい視点・価値観の発見
5. コミュニケーション能力の向上

トークフォークダンスは多くの参加者とコミュニケーションがとれるため、生徒と地域の方々との交流の接点数を増やすことに優れていると考えられる。そして対話を通じて、生徒と地域の方々双方で新しい視点や価値観の発見も期待される。さらに交流が進めば、生徒と地域の方々との繋がりが深まり、新たな学びの展開もみえるのではないだろうか。

(2) トークフォークダンスの実施事例

トークフォークダンスについてインターネットで検索をすると膨大な事例が報告されており、全国各地で実施されていることがわかる。そして上述した5つの可能性を探るような目的で行われており、小学生と中学生、中学生と大人、高校生と大人、大学生と大人など、校種に関わらず実践されている。

その実践も多様で、例えば宗像市立自由ヶ丘中学校では、新入生説明会の日に来年度入

学する小学6年生と最上級生になる中学2年生が1対1で実施し、「勉強がわからなくなったらどうしてですか」や「友だちはすぐできますか」といった、中学校生活の不安を払拭しつつ新学期が楽しみになるような質問内容を入れて交流を深めている(注12)。また、横浜市立寺尾中学校では、卒業間近の3年生が地域への愛着やコミュニケーション能力を育む目的で、「幸せな人生とは何」や「大人のずるいところはどこ」といった話しやすい質問を用いて実施しているケースもある(注13)。このように、参加者双方の交流やコミュニケーション能力の向上を目的とした実施ケースは散見される。さらに、近年のコロナ禍で運営方法について試行錯誤を重ねた福津市立福間中学校では、2021年度にはオンラインでの開催事例もある(注14)。

高校においてもトークフォークダンスの実施事例は散見されるが、必ずしもその活動の目的や質問内容、参加人数等が学校ホームページや新聞等に記載されるわけではなく、先行研究として網羅的に扱ったものも存在しない。そのため、一般に公開されている内容をもとに、以下にいくつかの事例を紹介していきたい(注15)。

<熊本県甲佐高等学校の事例>

甲佐高等学校は2020年に創立100周年を迎えた全校生徒数約80名の学校で、普通科、普通科福祉教養コース、ビジネス情報科の3学科を設置している。甲佐町唯一の高校で、甲佐町の『まちづくりプラン』を見ると、学校を支援し高校魅力化や町活性化に取り組もうとしていることがわかる。その中で、学校敷地内に生徒専用の公営塾(あゆみ学舎)を2017年度より開設し、運営は甲佐町と高校とが協力している(注16)。

この公営塾と生徒会とが、2018年の文化祭でトークフォークダンスを企画した。目的は、生徒と地域住民との交流を通して地域とのつながりを深めることや、大人との対話を通して生徒の自己肯定感や対話力を高めることで、「文化祭の思い出」や「1人にだけありがとうと伝えるなら誰に伝えますか」といった質問内容で対話が行われている(注17)。公営塾が運営主体となり、高校と地域とが協働して活動している事例と言える。

<島根県立津和野高等学校の事例>

津和野高等学校は県内中山間地に位置する学校で、1学年は普通科2クラス規模、2学年より3クラス編成で少人数指導を行っている。2011年度に島根県から離島・中山間地高校魅力化・活性化事業に指定され、地域協働による探究活動を実践して、地域と連携して生徒の「やってみたい」を育て「やってみる」を支援している学校である(注18)。

この学校の1学年の主要な活動の1つがトークフォークダンスであり、その目的は地域の人と出会うことや、コミュニケーションに前向きになる機会とすること、授業で得た学びや変化を相手に伝えることで自己理解を深めることである。運営は地域の有志団体のボランティアが行い、公民館など社会教育関係者の全面協力によって参加者を募っている。

対話のテーマ（質問内容）は、「朝食に何を食べたか」といった話しやすい内容から「高校でどんなことに挑戦してみたいか」といった今後の活動に迫るものなどがあり、話すテーマは教職員と地域住民とが熟議して決定している。このトークフォークダンスを経験した結果、地域の大人との継続的な交流を始める生徒も登場するという（注 19）。この場合も運営は地域が行っており、参加者の人選も地域から強力なバックアップがなされている。

<静岡県立裾野高等学校の事例>

裾野高等学校は 2022 年に創立 120 周年を迎えた、5 クラス規模の総合学科高校である。裾野市唯一の県立学校であり、裾野市と連携協定を結んでキャリア教育を重視しながら地域や産業界と連携した活動を展開している（注 20）。

この学校のトークフォークダンスの目的は、地域の方とのつながりや見守られていることを実感することであり、1 学年 100 名以上が参加する大規模開催が特筆すべき点である。2018 年度の初開催では生徒 200 人と地域の方 200 人の参加となり、2019 年度のチラシを見ると、特別協力として公益社団法人や商工会の名がみえる（注 21）。外部の協力があるとは言え、日頃の地域力や学校への理解がなければこのような充足した人数を揃えることはできないであろう。

以上の事例から、トークフォークダンスは地域と協力して運営され、地域の方々との繋がりや深まりを意図した取組として展開されていることがわかる。また、島根県立三刀屋高等学校や島根県立隠岐島前高等学校のように生徒の探究活動のテーマ設定や壁打ちを目的とする場合もあり、今後の生徒の学びの展開を意図した実践も行われている（注 22）。このことから、トークフォークダンスを実施する目的は、地域の方々との交流の接点づくりやコミュニケーション能力の向上を目指すほかに、その質問内容に応じて生徒の活動を深める契機とすることも考えられる。

それでは次項では、トークフォークダンスを実施することで、のおがた未来カフェが挙げる 5 つの可能性や先行事例でみられるような目的が達成されるのか、筆者が 2021 年度および 2022 年度に授業内で実施した事例をもとに検討していきたい。

3. 本校におけるトークフォークダンスの実践

（1）経緯と目的

本校は 2021 年 4 月 1 日からコミュニティ・スクールとして動き出し、先述したように社会に開かれた教育課程を実現する体制は構築されていた。しかし、多様な生徒と地域の方々との考えを交流できる機会は少なく、地域も主体的に学校へ関与するには不十分だと感じられた。そのため、授業内で生徒と地域の方々との考えを交流できる機会を増やし、生徒のやってみたいことや地域の方々の思いを見聞きする場を醸成していきたいと考え

た。また、地域を軸とした学びを展開している学校設定科目「社会科学入門」の授業において、学んだ内容が実社会ではどう捉えられているのか、地域の方々から生の声を聞いてみたいという生徒側からの要望もあった（注 23）。

そこで社会科学入門の授業において、本校初のトークフォークダンスを実施することとした。今回トークフォークダンスを実施するにあたり、生徒や地域の方々へ事前に伝えた活動目的は次の 3 点である。

1. 高大連携授業やフィールドワーク等で出てきた地域に関する疑問や興味・関心について、地域の方との対話を通して新しい視点や価値観を発見する
 2. 交流を通して頼りになる地域の大人の存在を知り、繋がりをつくることのできる
 3. 自分の考えをまとめ、適切に言葉で伝えながらコミュニケーション能力を向上する
- 上記 3 つの活動目的は、先行事例で目的として挙がっていた内容を踏まえ、地域の方々との繋がりや深まり、生徒のコミュニケーション能力の向上を意図したものとした。そして授業内容との繋がりを図るため、津和野高等学校の事例のように授業で得た学びを伝えることも目指し、活動目的の 1 つ目を授業での疑問や興味・関心に関連させるものとして、これまで学んできたことと聞いたこととを比較して考えていくことを目的とした。

（2）実施科目および実施時期

- ・実施科目：社会科学入門（2 年次総合進学系列必修科目）
- ・実施時期：2021 年度：9 月 21 日（火）1～2 限 → 1 月 18 日（火）1～2 限
2022 年度：9 月 20 日（火）1～2 限

初実施の 2021 年度は 6 月上旬に、授業で行政学や経済学の視点から地域を学んだ生徒から「地域の方々から生の声を聞いてみたい」という要望が出た。そのため、授業で学んだ内容を実社会と繋げたいとするその熱を冷まさないよう、地域の方々とのトークフォークダンスを計画した。そして夏課題の内容を当日の質問へ盛り込む形とし、運営側の準備期間を含めて実施は 9 月下旬とした。また、2022 年度においても同時期の開催とした。

しかし、2021 年度は新型コロナウイルス感染症拡大にかかる緊急事態宣言によって臨時休業となり、9 月実施ができなくなった。今後の開催も中止を検討していたところ、地域の方々から「高校生との対話ができるせっかくの機会」と要望があり、急遽年間予定を組み替えて年明け 1 月の開催とした。

（3）事前計画

トークフォークダンスの運営経験・参加経験ともに筆者にはなかったため、のおがた未来カフェが編集発行した運営冊子（注 24）と、以前から交流のある山形県立小国高等学校の運営方法を参考にして当日の計画を作成した。実施時間は授業時間の 1～2 限（8:40～10:30）とし、進行予定は次の表の通りとした。

時間	内容
8:30～	スケジュールや目的、育てたい生徒像の確認（地域の方々向け）
8:50～	開会・オリエンテーション、アイスブレイク
9:00～	トークフォークダンス（前半）
9:30～	休憩
9:40～	トークフォークダンス（後半）
10:10～	グループでの振り返り（グループ：大人2人、生徒2人程度）
10:20～	全体での振り返り
10:25～	閉会・片付け

地域の方々の参加者には、生徒とは別時間・別会場に集ってもらい、事前に本校の育てたい生徒像と活動目的について再度共有することとした。そして今回の活動が単に地域へ学校を開くためだけのものではなく、生徒と地域の方々との交流を通じて、未来の担い手を地域と学校とがともに育てる契機にしたい、という点についても伝えた。

また、トークフォークダンスにはファシリテーターの存在が欠かせないが、全体の司会者とファシリテーターは筆者が兼務することで計画を進めた。社会科学入門はティームティーチングによる担当者2名での授業展開をしているため、トークフォークダンスが始まるまでの地域の方々の対応を筆者、生徒対応を別の担当で分担した。

（4）参加者の人選

生徒側からの開催要望もあったため、トークフォークダンスを開催する前に生徒の興味・関心が何であるのか、次の表のようなアンケートを実施した。

アンケート項目	キーワード
1. これまでの講義で素朴に疑問だったことを挙げてください。	人口減、出生率、移住の理由、農業、地方自治
2. 地域の方に聞いてみたいことを挙げてください。	人口減の対策、移住の理由、特産物、子どもの頃の夢、取り組んでいること、幸せ、行事、一人暮らしの悩み、田舎で住むメリット・デメリット
3. この地域で挑戦してみたいことを挙げてください。	人口増の活動、空き地利用、交流の場の開設、魅力探し、地域貢献、新規イベント、行事の活性化
4. 地域のどのような人と話をしてみたいですか。	人口増の活動をしている方、地域に詳しい方、都会にも住んだことがある方、自営業の方、農業をしている方、地域活性化をしている方

アンケートの回答をキーワードでまとめると、生徒の関心は「人口増減」や「農業」に関連するものにあることがわかった。この結果は、1学期の授業で大学教員から行政学（地方自治）と経済学（農業による地方創生）の講義を受けたことに影響されたと考えられる。また、アンケート項目3と4で「活性化」のキーワードが出ているのは、本校の先輩たちが地域活性化に関する活動をしてきたことに影響を受けたものであろう。このような生徒の興味・関心に基づいて参加者を決定する必要が出てきた（2022年度もほぼ同様の興味・関心だったため、同様の人選を行った）。

トークフォークダンスで1対1の対話を設定するためには、生徒数と同数の地域の方々を招聘する必要がある。本授業の受講生徒は2021年度17名、2022年度14名であったが、長期欠席や当日欠席も想定して人選を行う必要も生じた。そのことも踏まえ、本校のトークフォークダンスに参加した地域の方々の人数や属性は次の表の通りである。

2021年度（14名）	2022年度（11名）
企業関係者 3（コン1）	企業関係者 1（前1、コミュ1）
自営業 4	自営業 2（前1）
NPO法人 1（コン1）	NPO法人 1（前1、コミュ1）
地域おこし協力隊 2	地域おこし協力隊 3（前2、コミュ3）
道の駅関係者 1	道の駅関係者 1
まちづくり協議会 1（コン1）	下宿運営連絡会 1（コミュ1）
元教員 1	元教員 1
P T A 1（コン1）	大学生 1

※数字は参加人数で、2022年度項目にある「前」は前年度からの連続参加者

※「コン」は地域人材育成コンソーシアム・いいなん（2021年度まで）の関係者

※「コミュ」はコミュニティ・スクール（2021年度から）の関係者

人選においては、地域人材育成コンソーシアム・いいなんやコミュニティ・スクール等の会議でアナウンスをした後、関係者には改めて連絡をして出欠確認を取ることとした。先行事例では地域と協力して運営しているケースがみられたが、半数近くの参加者が上記会議の関係者で充足したことを踏まえると、学校から地域へ要望できる場があるとスムーズに準備が進むことが認められた。

一方、残り半数近くの参加者については生徒アンケートの回答をもとにして、上記両組織に所属する飯南・飯高両地域振興局長や参加予定者から紹介していただいた。両組織の関係者に協力を要請することで、本校の教育活動に理解の高い方々が参加する可能性が高く、生徒との意見交流も活発になると考えた。ただし、社会に開かれた教育課程を展開し

ていくという点では多様な参加者を招聘する必要もあるため、2022年度においては前年度参加できなかった方にお声がけし、高校生から近い大人として本校卒業生の大学生にも参加してもらうこととした。

懸念していた参加生徒数については、2021年度は11名、2022年度は10名であった。当日集合してみるまで生徒・地域の方々双方の人数は確定しないため、参加人数を把握した後には人数調整する必要が出てきた。2021年度は生徒6名分が欠員となったため、地域おこし協力隊の方1名を生徒役、教員1名を生徒役として13対13とした。2022年度においても生徒1名分が欠員であったため、教員1名を生徒役として11対11として対応した。また、本校と連携型中高一貫教育を実施している2中学校から、いずれの年度も校長が参観された。

(5) 質問内容

トークフォークダンスでの対話の時間は、前半30分、後半30分とした。まず場の緊張をほぐすために、開会后5分程度のアイスブレイクの時間を確保した。アイスブレイクでは「連想拍手」を用い、会場全体が対話しやすい空気になるよう工夫をした。

今回実施したアイスブレイクの内容は、「質問に対して目の前の方が言いそうなことを答える」という初めて体験する方にも簡単なもので、同じ回答であればお互いに「拍手」、違う回答であれば「全力で残念と言う」ものである（注25）。当日に使用した質問と意図は次の通りである。

1. 「赤くて丸い食べ物と言えば」

→梅干しやリンゴ、トマトといったように回答が多様に出るため、参加者は相手と同じ回答を出そうと夢中になって盛り上がる

2. 「みそ汁の美味しい具材と言えば」

→世代によって食材のトレンドは異なるようだが、同じ回答にならなくても違いを楽しむようになり、意見の違いを受け入れる態勢を醸成できる

3. 「三重県にある市の名前と言えば」

→本校が松阪市に所在するため、ほぼ全員が松阪市と回答して会場が和む

アイスブレイクを実施した結果、あまり難しくなく多様な回答の可能性があるかと、考えながらも楽しんでいる様子がみえた。質問3については全員が同じ回答をしたため拍手が響き渡り、トークフォークダンス開始前に対話のための安心・安全の場を作り上げることができた。

対話しやすい空気に場が包まれたところで、本日のルール（交流ごとの挨拶、1分間話し続ける、生徒が話し終わったら時計回りに移動）を共有し、前半のトークフォークダンスを開始した。

<前半の質問内容>

大人が回答するもの	生徒が回答するもの
1. 趣味や特技は	1. 熱中していることは
2. 子どものころに持っていた夢は	2. 将来やりたいことは
3. 失敗したけど楽しかったことは	3. 授業をしていて成長できたことは
4. 高校生のうちにやって欲しいことは	4. 大人にしてほしいことは
5. なぜ仕事をするのか	5. なぜ宿題をするのか
6. 挑戦していることは	6. 興味のある仕事は

回答は、大人→生徒→（生徒が時計回りに移動）→大人→生徒といった順番として、まずは大人から回答してもらう形をとり、生徒が回答する際の手本となるようにした。そして、アイスブレイクからの雰囲気や損なわないよう、トークフォークダンス前半は話が進みやすそうな話題を中心として、生徒アンケートの回答や先行事例を参考にしながら質問内容を構成した。また、大人と生徒が回答する1セットは双方に関連のある内容として、聞き手・話し手が入れ替わっても思考が続く工夫をした。次第に地域の方々から「1分では時間が少なすぎる！」という声が聞こえてきたため、途中で1分30秒程度を確保し、対話の度合いをうかがいながら時間を調整した。

前半終了後、休憩10分をはさんで後半のトークフォークダンスの時間とした。この休憩の時間にも、引き続き生徒と地域の方々との対話する姿がみられた。

<後半の質問内容>

大人が回答するもの	生徒が回答するもの
1. 地域の良さや魅力は	1. 地域の良さや魅力は
2. 地域の穴場は	2. 地域にあったらよいと思うものは
3. なぜ地域で人口が減っているのか	3. 地域に人が集まるためには何が必要か
4. 地域で生活して楽しいことや幸せなことは	4. 幸せと感じる時はどんなときか
5. 地域で稼げる仕事はできるのか	5. 高校卒業までに挑戦してみたいことは
※5が終了後、生徒から大人への追加質問	

後半は地域に着目した話題として、これまでの授業の学びを深めていく展開とした。人口減の問題については、大人にとっても瞬時に回答できず苦戦した様子やうかがえたが、その場で思考を巡らす姿がみられた。すでに前半において1分間では語れないとの声が挙がっていたため、当初から2分程度の時間設定とした。

追加質問の時間には、2021年度は年度末に授業内で実施される研究発表会が迫っている

こともあって、生徒自身がプロジェクトについて考えていることを語る姿がみられた。これは結果的に、三刀屋高等学校や隠岐島前高等学校の事例のように今後の生徒活動の展開に繋がる内容となった。また 2022 年度については、5 月下旬に授業内でフィールドワークに出かけた際の疑問や、夏課題で自分が興味のあることと地域との関わりについて取り組んだ内容について伝える様子がみられた（注 26）。

写真 1



写真 2



写真 1：地域の方々が内側の円、生徒が外側の円に座り、身振りも交えながら自身の思いを語っている

写真 2：グループでの振り返りでは自由な意見交流が行われ、生徒も地域の方々も積極的にメモを取る姿が見られた

4. アンケートの分析

(1) アンケートの実施方法

2021 年度 2022 年度ともに、トークフォークダンス当日に生徒・地域の方々双方にアンケートを実施した。対象人数が少ないため全て記述式の回答とし、今後の生徒活動に繋がる内容がないか確認する手段としても活用した。2021 年度は生徒 11/11 名、地域の方々 12/14 名、2022 年度は生徒 10/10 名、地域の方々 10/11 名の回答を得た。以降のカッコ（「 」）内には、アンケートでの回答の原文を示すこととする。

(2) 生徒対象のアンケート結果

【質問 1】 トークフォークダンスをやってみて良かったところやうまくいかなかったところを書いてください。

「大人の意見と自分の考えは少し違っていることに気付くことができた」や「今まで自分の中でしか考えられなかった問題が、いろんな大人の人の意見を取り入れることで新しい考えが生まれた」と回答があり、新しい視点や価値観を発見する生徒がいた。これにより、今回の活動目的の 1 つ目は達成できたと言える。そして、「自分の意見をうまく言えるようになった」や「自分が伝えたい事を最後まで伝えられた」のように、コミュニケーション能力の向上も感じられる内容もあった。

しかし一方で、「自分が話すときに途中で話すことがなくなった」や「自分の思っていることを言葉にすることが難しかった」と回答する生徒が半数近くおり、参加生徒全体で考えると対話的スキルには課題がみえた。また、「近くにいても聞きとりづらい場面がいくつかありました」という回答もあり、会場設営の改善の余地もみられた（注 27）。

【質問 2】 地域の大人の意見で参考になったことを書いてください。

ここではまず、「茶畑や山など田舎らしいところが、この地域の魅力である」や「都会と比べ人と人の距離が近くすぐに仲良くなれる」といった地域の魅力を感じる回答がみられた。これは、トークフォークダンス後半の質問内容「地域の良さや魅力は」への回答が表れたものだろう。

ここでの回答で注目したいのは、「高校生は失敗が許される時期だからたくさん失敗してほしい」や「いろいろな事に挑戦した方がいい」といった、地域の方々からエールをもらった回答が多数あったことである。生徒は授業内容以上に、活動を応援する言葉に心打たれたことは特筆すべき点である。また、地域で「自分がやりたいことをやる」という自己承認が高まったと思われる回答もあり、トークフォークダンス中に対話を繰り返して、活動することについて前向きに捉えられる発言を多く受けたものと推測される。

【質問 3】 今日の目的は達成できましたか。

質問 1 と同じように、新しい視点を発見できたという回答やコミュニケーション能力の向上に実感を持った生徒がみられた。質問 1 においては半数近くが対話的スキルに課題を持っていたが、ここでは「コミュニケーション能力が上がり、会話もはずむようになってきた」や「1分という短い時間だったからかもしれないが、会話がとまることがなかった」といった肯定的な回答が多かった。このため、今回の活動目的の 3 つ目もある程度達成されたものと言えよう。また、回答の中には「地域の人たちにうまく話せるとよとか、話がうまいなどと言われた」というものもあり、地域の方々が生徒の成長を支援しながら進めてくれていたことが読み取れる。

そして、「自分の考えと地域の方の意見の比較をすることができた」や「大人の会話術や聞く技術などとても勉強になりました」と回答する生徒もおり、単に対話をするだけでなく自己理解を深め、次の学びに繋がる視点を持てていることも分かった。また、地域の大人との繋がりづくりという部分では、「ブランディングでもしできることがあれば、お手伝いさせてください」と言ってもらえたという内容や「生徒が何かをすると、協力してくれる」という意見があり、質問 2 の回答であった高校生の挑戦を応援する内容との繋がりがみられた。このことは、裾野高等学校のトークフォークダンスの目的であった、地域の方とのつながりや見守られていることを実感することにも関連するものであり、今回の活動目的の 2 つ目も達成できたと言える。

【質問 4】 今後地域の大人と一緒にやってみたいこと、もっと話したいことはありますか。

ここでは、「もう 1 回トークフォークダンスみたいな話せる機会が欲しい」や「もっと知りたい」という回答が多数みられた。そして、「1 分じゃなくて 2 分はください！」や「今度は 1 人 1 人ともっと長い時間話し合ってみたい」という声もあり、短時間で多くの参加者とコミュニケーションを取るトークフォークダンス以外にも、地域の方々との対話機会を求めていることもわかった。

また、「高校生と大人が協力してイベントを企画する」や「この地域の目玉になるものを作ってみたい」など、授業での学びを踏まえながら自身の今後の挑戦を語る内容もみられた。生徒が今回のトークフォークダンスを肯定的に捉え、地域と協働して新たな価値創造や何かをやってみたいという意欲が読み取れる。

(3) 地域の方々対象のアンケート結果

【質問 1】 最も印象に残った内容（やりとり）は何ですか。

地域の方々のアンケートの回答からは、大きく 3 つの傾向がみられた。1 つは「生徒の将来への不安」に関するもので、トークフォークダンス後半の質問内容「地域で稼げる仕事はできるのか」に対する地域の方々の回答を聞いた後、収入への不安や将来どうすれば安定できるかなど生徒からのつぶやきがあったものと思われる。参加生徒は 2 年次生のため、来年度 3 年次生となり進路に悩む時期であり、その不安がそのまま表れたのだろう。またそれに関連して、「高校生たちなど若い人たちが『やりたい』と思う仕事がない点は、人口減少という課題にもつながっているのかなと感じ」という意見もあり、地域の方々も考えさせられる内容になったことが読み取れる。

次に傾向としてみられたのが、「生徒の考える地域」に関連するものである。「飯南のものを使ってブランド化したいという話が印象的でした」や「飯南高だからこそできる『地域』と『学校』の関係づくりをさらに深めたいという生徒の考え方を聞いてうれしかった」という回答からは、生徒の今後やってみたいことが授業での学びを踏まえ、地域をテーマとした内容であることがうかがい知れた。そして、「地域への想いが強く、地域活性化などの話が良かった」や「高校生も豊かな自然に価値を感じている」など、生徒の発言に共感する部分も見られた。

最後に、「自己の考えの深まり」に関する内容である。「地域の若者から将来やりたいことを聞く機会が無かったため、高校生の将来やりたいことは何かという質問が最も印象的だった。また、その意見から今後の自分の活動に活かすことができそうだった」という回答は、今回のトークフォークダンスが生徒だけの学びではないことを物語っている。「高校生とお話することで、この地域について、またいろいろと考える機会ができ」たことも、地域の方々の学びであったことの表れである。

【質問 2】 今後本校の生徒と一緒にやれそうなこと、やってみたいことはありますか。

この質問に対しては、自身の持つスキルを生徒の活動に活かしたいという回答がみられた。農業体験や音楽活動など、地域の方々が得意とする分野と生徒のやってみたい内容とがマッチングできた場合、生徒の探究活動は飛躍的に向上する可能性を秘めている。この回答から、飯南・飯高地域には生徒に寄り添いながら一緒に活動してもらえる伴走者が多数存在することがわかった。

そして、「生徒と一緒に地域の未来を考える会」や「地域とつながれる、地域のためになるイベント」をやってみたいという声もあった。このことは、生徒アンケート質問 4 で生徒が「高校生と大人が協力してイベントを企画する」と今後の挑戦を語った内容と一致している。今後生徒が学びを深めて活動をしていった場合、地域も主体的に巻き込んだ新たな展開の可能性が感じられる。

(4) アンケート結果のまとめ

上述したアンケート結果から、トークフォークダンスを実施するにあたり授業で設定した 3 つの活動目的はおおむね達成されたと言える。このことは先行事例で取り上げた、地域との繋がりを深め自己肯定感や対話力を高める甲佐高等学校、地域の人と出会いコミュニケーションに前向きになる機会とし、授業で得た学びや変化を相手に伝え自己理解を深める津和野高等学校、地域の方との繋がりや見守られていることを実感する裾野高等学校の目的をもおおむね達成できたこととなる。そして先に述べたように、のおがた未来カフェはトークフォークダンスの持つ可能性として、自己承認意識の向上、新しい視点・価値観の発見、斜め・横の関係性の発見、大人も新しい視点・価値観の発見、コミュニケーション能力の向上の 5 つを挙げている。これらについてもアンケート結果から読み取ることができ、上記は可能性にとどまらず、トークフォークダンスによって実現できることと言える。

また、トークフォークダンスを経験したことによって、生徒は地域の方々からの応援が直接伝わり、やってみたいと挑戦を語り出すこととなった。たしかに運営側の教員が意図的に質問内容を構成しているところはあるが、地域の方々から「いろいろな事に挑戦した方がいい」と後押しされたことは、生徒の自己肯定感や活動に対する気持ちを高めるのに十分だったと考えられる。このことから、生徒の「やってみたい」を地域と連携して支援している津和野高等学校におけるトークフォークダンスは、生徒の挑戦への気持ちを高め、今後の探究活動への発展をも考えた実施であるとも言えるだろう。津和野高等学校で地域の大人との継続的な交流を始める生徒が登場していることはその裏付けであるし、三刀屋高等学校や隠岐島前高等学校の事例も踏まえると、トークフォークダンスは生徒の学びのための豊かな土壌として機能するものである。

そして、生徒の挑戦に対して地域の方々は、共感したり応援を送ったりするだけでなく、自らも一緒にやってみたいという反応を示した。貝ノ瀬滋氏は地域と協働した学校教育の在り方の中で、「一つの学校がコミュニティ・スクールになるということは、学校を核として、多くの様々な『何か役に立ちたい』と思う市民や関係機関等と更なる『つながり』を広げていくことになる」としている（注28）。この場合の「役に立ちたい」は文脈上で大人側に向けた内容ではあるが、このトークフォークダンスを通じて生徒もコミュニティ・スクールの関わりの中に直接入ることで、生徒のあるいは地域の方々の「役に立ちたい」が繋がり、大きなうねりになる可能性が考えられる。

一方、高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会では、コミュニティ・スクール（学校運営協議会）と地域学校協働活動の一体的推進のモデルの一つとして、コンソーシアムの構築を促進する事業や取組の必要性を検討課題として挙げている。その中で、「コンソーシアムの構成員は、高校・地域ごとの協働の目的によって柔軟に設定でき、多様な形が考えられる。高校生自身も参加できる機会があることが望ましい」としている（注29）。今回のトークフォークダンスのように生徒と地域の方々とが対話できる機会を構築し、今後は参加者も多様に募集していくことで、より広い規模での学校と地域との協働が生まれ、生徒のより良い学びの実現に繋がるのではないだろうか。

また、トークフォークダンスの活動目的は当然生徒を学びの主体としたものであったが、地域の方々への学びや気づきにも繋がることとなった。のおがた未来カフェがトークフォークダンスの可能性として「大人も新しい視点・価値観の発見」を挙げていたが、アンケート結果により、トークフォークダンスは参加者全員に学びがある活動ということが示された。斎藤薫氏は、クールジャパン高校生ストーリーコンテストからみえてきた地域を元気にする「人財」としての高校生の可能性について考察しているが、そこで高校生の関わりが地域にもたらす効果と可能性として、「地域の大人世代の気づきや変化を促す」ことを挙げている。その説明の中で、「高校生が『おもしろい』と注目し、……『このまちを消滅させたくない！』とする想いがまちの人々に触媒のような作用をもたらし、官民あがての取り組みが始まりつつあ（注30）」と述べている。このことは、トークフォークダンスの実践からも今後起こり得るものであろう。このためトークフォークダンスは、生徒の学びの場であるだけでなく地域の方々に対しても学びの場であり、それぞれが挑戦を語りながら様々な協働を生む可能性のある場でもある。

5. おわりに

本校では2度の事例しか検討材料はないが、先行事例や今回のアンケート結果を踏まえると、トークフォークダンスは学校と地域とを繋げる活動として効果的であり、生徒と地域の方々との交流を深めていく場として機能することが示された。そして、授業から生まれた疑問や興味・関心から話が進み、生徒や地域の方々双方の挑戦したいことを語り合い

ながら、今後生徒の学びから新たな地域との協働が起こっていく可能性も示すことができた。これは授業での学びと実社会とを繋げていくことにもなり、トークフォークダンスは社会に開かれた教育課程を進めていく上で有益な方法の一つであると言える。

実は 2021 年度実施の生徒からは、このトークフォークダンスを契機として地域の方々との交流が広がり、3 年次いいなんゼミ（総合的な探究の時間）においてやってみたい挑戦を実現した生徒が登場した。ある生徒は、高校生目線で松阪市のふるさと納税を考えたいと打ち明け、対話したまちづくり協議会の方と意気投合した。その後松阪市の担当者と繋いでもらい、道の駅と協働しながら育ててくれた飯南・飯高地域への恩返しのためにアクションを起こした。また別の生徒は地域のブランディングを考え、地域活性化について取り組んでいる方と対話した。その後も交流を重ね、自身のやってみたい想いに導かれながら多くの地域の方々と対面・オンラインにこだわらず繋がり続け、最終的に地域の方々と清掃ボランティアを共同開催して多様な方が交流をする場づくりを行った。まだまだ事例は少ないが、強力な地域の伴走者とともに生徒の学びが深まる事例が登場し、トークフォークダンス後も生徒と地域の方々とが繋がり、協働した学びが発展していく可能性は高いと考えられる。

またこのトークフォークダンスは、本校と連携型中高一貫教育を実施している中学校からの参観があったことで、2022 年度には中学校においても形を工夫して実施されることとなった（注 31）。このことは、2021 年度に小中高と繋がった飯南・飯高地域のコミュニティ・スクールの広がりの可能性をも感じられるだろう。

実践して見えてきた課題としては、トークフォークダンス参加者に関するものが挙げられる。今回はコミュニティ・スクールの関係者を中心に参加者を募って実践したが、社会に開かれた教育課程を進め、地域とともにある学校へと転換していくには、今後は多様な参加者を招聘する必要がある。そして当日の欠員を考えると、1 対 1 ではない対話のスタイルも模索しなければならない。また、教員のみでの運営は準備段階から当日のファシリテーションに至るまで様々に負担がかかるため、先行事例のように地域と協働して運営することも検討課題である。

今回先行事例や実践をまとめながら、トークフォークダンスで実現できたこととともに多くの可能性や今後の課題を得ることができた。そして、地域の方々の生徒に対する応援や支援を感じることもできた。生徒を育てていくためにより良い学び場をつくり、今後も地域と協働した学びの方法を考え実践していきたい。

注 1 文部科学省：高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）、p17。

注 2 文部科学省：社会に開かれた教育課程、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2020/01/28/20200128_mxt_kouhou02_03.pdf、（参照 2022 年 12 月 30 日）。

注 3 前掲注 2 を参照。

注 4 県立高等学校活性化計画については、三重県ホームページ「県立高等学校活性化計画について」(<https://www.pref.mie.lg.jp/KYOKAI/HP/kasseika/index.htm>)を参照されたい。

注 5 高校と地域をつなぐ人材の在り方に関する研究会：高校と地域をつなぐコーディネート機能の充実に向けて－社会に開かれた教育課程と高校を核とした地方創生の実現を目指して－、p33、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング、2020。

注 6 三重県立飯南高等学校：文部科学省指定事業 令和元年度採択 地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）研究開発実施報告書・第 3 年次、p15、三重県立飯南高等学校、2022。

注 7 本校は総合学科のため、学年に関する表記は年次としている。

注 8 コミュニティ・スクールの在り方等に関する検討会議：コミュニティ・スクールの在り方等に関する検討会議 最終まとめ ～学校と地域が協働する新しい時代の学びの日常に向けた対話と信頼に基づく学校運営の実現～、p16-17、2022。

注 9 林真未：「トーク・フォークダンス／大人としゃべり場」が全国密かに浸透中、学びの場.com、2020 年 2 月 7 日、<https://www.manabinoba.com/tsurezure/018816.html>、（参照 2022 年 12 月 30 日）。

注 10 のおがた未来カフェ：大人としゃべり場 トーク・フォークダンスで語ろう、p1、のおがた未来カフェ、2018。また、この冊子や前掲注 9 のように「トーク・フォークダンス」と表記する場合もあるが特に厳密な使い分けはみられず、本校で実施の際は「トークフォークダンス」と資料等に表記したため、本稿では引用の場合を除いてトークフォークダンスと表記を統一する。

注 11 前掲注 10、p2 を参照。

注 12 学びの丘学園：学びの丘学園 小中一貫教育の取組として、おかのうえのぼくら、5、p1、学びの丘学園、2018。

注 13 寺尾中でトークフォークダンス 3 年生、地域住民と語る、神奈川新聞、2019 年 3 月 5 日、カナロコ、<https://www.kanaloco.jp/news/life/entry-152197.html>、（参照 2022 年 12 月 30 日）。

注 14 今橋修：コロナ禍でも良いことは何とかしてやり続けようと、諦めず試行錯誤して実現したトーク・フォークダンス、福津市立福間中学校学校通信（78）、2021、<http://www.city-fukutsu.ed.jp/fukuma-j/index.cfm/17,1277,c,html/1277/78.pdf>、（参照 2022 年 12 月 30 日）。

注 15 トークフォークダンスについてより詳細に分析するためには、これまでの実施校へのヒアリングやデータ集約等が必要になる。実施校の目的や質問内容について調べを進めていく段階ですでに膨大な事例かつ多様な実施状況であり、今回そこまでの検討ができた

かったことは今後の課題である。

注 16 甲佐高等学校の情報については、学校および甲佐町ホームページを参照した。

注 17 甲佐町役場：高校生が地域との会話で異世代交流、広報こうさ、593、p5、甲佐町役場、2018。これによれば、熊本県内の単独校でトークフォークダンスが実施されるのは今回が初という。

注 18 津和野高等学校の情報については、学校ホームページや後述注 19 を参照した。

注 19 島根県立津和野高等学校：1年トークフォークダンス、総合的な探究の時間【T-PLAN】実践報告書、p9、島根県立津和野高等学校、2020。藤崎雅子：先進校に学ぶキャリア教育の実践、キャリアガイダンス、444、p51、株式会社リクルート、2022。

注 20 裾野高等学校の情報については、学校ホームページを参照した。

注 21 静岡県立裾野高等学校：裾野高校 トークフォークダンス、国立中央青少年交流の家、https://fujinosato.niye.go.jp/app/wp-content/themes/fujinosato_2019/img/about/pdf/sdgs_case_susonokotalkfolkdance.pdf、（参照 2022 年 12 月 30 日）。

注 22 島根県立三刀屋高等学校：【1年産社】トークフォークダンスを行いました、島根県立三刀屋高等学校ホームページ、2018 年 1 月 23 日、<https://www.mitoyahs.ed.jp/information/6654>、（参照 2022 年 12 月 30 日）。島根県立隠岐島前高等学校：夢探究Ⅱで生徒・教員のトークフォークダンスを実施しました、島根県立隠岐島前高等学校ホームページ、2021 年 3 月 19 日、<https://www.dozen.ed.jp/teachers/4513/>、（参照 2022 年 12 月 30 日）。「壁打ち」とは上記隠岐島前高等学校ホームページによると、「現時点での自分や自分たちの考えを相手に出し、問いを投げ返してもらうことで、自分や自分たちが気付いていなかった部分に新たに気付きを得ること」であり、アイデアを広げたり深めたりしたい場合等に活用される活動のことである。

注 23 社会科学入門の授業内容や地域を軸とした学びについては、次の拙稿を参照されたい。多賀秀徳：社会科学入門における高大連携授業の展開 ―地域を軸とした学びを通して―、ユマニテク教育研究所紀要、1、p92-108、2022。

注 24 前掲注 10 を参照。

注 25 「連想拍手」については、前掲注 10 の p9-10 を参考にアレンジを加えた。

注 26 社会科学入門の授業における夏課題の意図や内容については、前掲注 23、p102 を参照されたい。

注 27 ただこの部分については、運営側としてあえて聞き取りづらい場面を設定しており、1対1の対話に集中させようとする意図があった。地域の方々のアンケート回答からは「話をするなかで、イスの間のキョリが近くなってくるのがよかった」とあり、相手の話を傾聴するため自然と距離を縮め、その場で対話を工夫する生徒の様子を感じ取れる。

注 28 貝ノ瀬滋：地域と協働した学校教育の在り方 ～新しい学校教育の扉の鍵はコミュ

ニティ・スクール～、中等教育資料、1036、p16、2022。

注 29 前掲注 5、p33。

注 30 斎藤薫：地域を元気にする存在としての高校生の可能性、JTB 総合研究所、2019 年 11 月 12 日、<https://www.tourism.jp/tourism-database/column/2019/11/possibility-students/>、（参照 2022 年 12 月 30 日）。

注 31 中学生の対話の安心・安全の場づくりとして、1 対 1 の形にこだわらず、大人 1 対生徒 3 のようにグループで回り交流を深める工夫を行っていた。